

「特別史跡五稜郭を知る」

1, 五稜郭前史

①, 蝦夷地産物交易の拠点 — 宇須岸

函館市街地の特徴的な地形は、海底噴火により形成された火山島である函館山が、海流により運ばれた砂や川が運んだ土砂が堆積して出来た砂州により亀田半島と陸続きになった「陸繋島(トンボロ)」に因ります。この陸繋砂州と陸繋島・函館山に囲まれた波の穏かな湾に面した土地に和人が定住するようになったのは、北朝年号貞治6年(1367)の年号が刻まれた碑(「貞治の碑」)が存在することから、南北朝時代(1336~1392)には定住していたことが考えられます。

室町前期の元弘4年(1334)に著されたとされる『庭訓往来』(ていきんおうらい)の諸国産物を紹介している項目には「宇賀昆布」の記述があります。「宇賀」は現在の函館から東側の亀田半島海岸地方の呼名であることから、当時から昆布が名産品として有名であったことがわかります。



「貞治の碑」



「貞治の碑」木版画

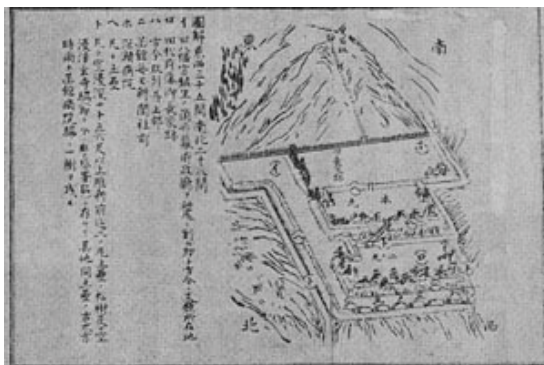
また、正保3年(1646)に編纂された松前藩最古の史書『新羅之記録』には、永正年間(1504~1520)には、

「宇須岸全盛の時、毎年三回充(ずつ)若州より商舶来り、此所の問屋家々を渚汀に掛造と為して住む、依て、纜(ともづな)を縁の柱に結び繫(つな)ぐなり」

という記述があり、箱館は、若狭と結んで日本海を舞台とした活発な交易活動が行われていたようです。この「宇須岸(うすけし)」という地名は、アイヌ語で「湾の端」を意味する「ウシヨロケシ」から転訛したもので、史書によっては、「宇曾利鶴子」などと表記されています。

②, 和人勢力の渡来 — 「箱館」と道南十二館

蝦夷地産物の交易港であった「宇須岸」に侍の一大勢力が渡来したのが享徳3年(1454)とされています。津軽の豪族、安東政季(あんどうまさすえ)が南部氏との戦いに敗れ、松前家の始祖となる武田信広らを従えて蝦夷地に渡って



河野加賀守政通築城館跡之図

きました。その武将の一人である河野政通(こうのまさみち)が宇須岸に「館」を築き拠点としたのです。函館の江戸時代までの表記のしかたである「箱館」の地名は、一説には、この「館」が七重浜から見ると「箱型」をしていたので「箱館」となると云われています(『蝦夷島奇観』)。また、館を造る時、鉄器の入った箱が出土したので「箱館」(『蝦夷実地検考録』)とか、アイヌ語で

「小さな砦」を意味する「ハクチャシ」と呼ばれていたのが変化して「ハコタテ」(『北海道蝦夷語地名解』)になったなどの説があります。

道南には、「箱館」の他、現在の上ノ国町の「花沢館」や松前町の「大館」、函館市の「志濃里館」など、和人豪族の拠点である十二の「館」が存在していました。(『新羅之記録』) 各館主は、これらの館を拠点として、周辺のアイヌの人々や和人商人との交易、領域支配にあたっていました。が、和人の横暴と、それに抵抗するアイヌの人々との相次ぐ抗争(コシヤマインの蜂起=康正2年(1456)など)により多くの館が攻め落とされ、箱館も衰退しました。

③. 北の商港 — 高田屋の繁栄と没落

慶長9年(1604)、徳川家康からの「黒印状」により所領安堵、松前藩が成立した後も、アイヌの人々との戦乱により荒廃した箱館は復興せず、無人の「から家あり」という状態が続き、亀田に定住者が増加し「家二百軒余」(『津軽一統志』)と記されています。松前藩は、亀田番所、後に亀田奉行を置いて治めましたが、箱館湾に注いでいた亀田川が洪水による氾濫を繰り返し、河口が土砂で埋まり船が停泊できなくなるとともに、再び箱館側に人々は移住し、寺院なども移転すると同時に、箱館は復興してきました。

「亀田村・・・当村に已然は船懸りよき澗これあり候えども、近年遠浅になり、船懸り悪しく相成り候故、同所向い合せの箱館村と申す所、澗これあり、諸国の船多く懸り申し・・・」(『松前蝦夷記』)

箱館は、福山(松前)・江差とともに「松前三湊」のひとつとして、蝦夷地海産物取扱いの港となり大きく発展しましたが、間もなく、ヨーロッパ諸国の船舶が蝦夷地周辺に出没するようになります。

箱館には、最初の外国船として、ロシアの使節**アダム・ラクスマン**が、寛政5年(1793)に入港、上陸し、幕府も蝦夷地を始めとする北辺に関心を示すようになりました。

幕府は、寛政11年(1799)に、東蝦夷地海岸地帯の直轄の他、享和2年(1802)には、蝦夷奉行(後に箱館奉行)を箱館に置き、文化4年(1807)には、松前藩を奥州梁川(福島県)に移封させ、文政4年(1821)まで全蝦夷地を直轄します。



アダム・ラクスマン

この間、淡路島出身の船持ち船頭、高田屋嘉兵衛が寛政10年(1798)、箱館に店を



高田屋嘉兵衛

開き、択捉航路の開発や北洋漁場の経営を行うと同時に、箱館の海岸の埋立てによる築島の造営と造船所の設置や箱館山への植林事業などを行い、文政7年(1824)には本店となり、併せて、文化8年(1811)、ロシア軍艦の**ゴローニン**艦長を幕府が捕縛監禁した事件を、嘉兵衛が円満に解決したことから、ロシアと日本の関係も好転することとなりました。

文政4年(1821)、幕府は蝦夷地の直轄を解き松前藩は復領しましたが、天保2年(1831)ロシアとの密貿易の嫌疑をかけられた高田屋の没落と、東蝦夷地の凶漁による商業

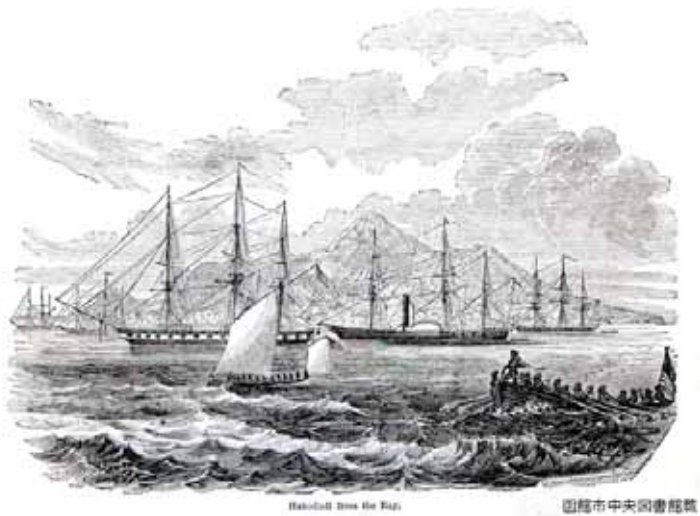
の不振により活気が失われつつある箱館にやってきたのがアメリカの東インド艦隊司令長官ペリー提督です。

④、ペリー艦隊の来航と開港場 HAKODADI

嘉永6年(1853)6月、浦賀沖に現れたペリー提督率いるアメリカ艦隊は、鎖国下の幕府に、アメリカ大統領からの通商を求める国書を呈して、徳川幕府に開国を迫りました。当時、北太平洋で盛んになっていた捕鯨に関する船舶の薪水食糧の補給と漂流民の保護、また、有望な市場である中国・東南アジアへの貿易港路の寄港地を日本に求めていたのです。

ペリーは、この時は一旦、日本を去りましたが、翌安政元年(1854)に回答を求めて再び来航、「黒船」による威嚇も功を奏し、徳川幕府は「日米和親条約」を締結して伊豆の下田と箱館の二港の開港を決定しました。

箱館は翌年からの開港となりましたが、ペリー提督は艦隊を箱館に入港させ、港内の深浅測量や動植物の調査を実施すると同時に、幕府から応接を命じられた松前藩の家老らを相手に遊歩地域の交渉などを行いました。



『ペリー提督日本遠征記』より「箱館の街並み」

初めて眼にする巨大な黒船艦隊の威容に当初は恐れ慄いていた箱館の住民でしたが、上陸した異国人の人懐っこい様子に恐怖感は薄れ、積極的に交流を図る者も現れました。この草の根の交流から、地元住民の浜言葉である「ハコダデー-HAKODADI」が地名としてそのまま西欧に紹介されることとなります。

幕府は再び箱館奉行を設置し、安政2年(1855)の「和親開港」の直前には全蝦夷地を直轄して、箱館が西欧列強との交渉・蝦夷地経営の拠点として再び歴史に登場しました。

『ペリー提督日本遠征記』より「箱館湾測量図」

